

News Letter

琉球大学広報誌

2024 Autumn Vol.35



琉球大学
UNIVERSITY OF THE RYUKYUS

<https://www.u-ryukyu.ac.jp/>

Island wisdom, for the world, for the future.

News Letter Vol.35 2024年11月発行

〒903-0213 沖縄県中頭郡西原町字千原1番地

総務部総務課広報係

TEL.098-895-8175 kohokoho@acs.u-ryukyu.ac.jp

【目次】

●注目! 琉大生

・人文社会科学部研究科博士後期課程
金 孝珍さん(2024年9月修了)

●特集Ⅰ:

琉大ブランド商品開発支援事業

・琉大銘菓はたのすけ
・琉大うむてん、琉大おいもチップス

●特集Ⅱ:

特別寄稿「レインボー・ブリッジ」

●クラブ・サークル紹介

・琉大ハニー養蜂部
・琉球大学Robotサークル

●ニューストピックス

02

03

07

11

13

注目! 琉大生



金 孝珍さん
KIM HYOJIN

PROFILE

人文社会科学部研究科博士後期課程 (2024年9月修了)
韓国出身

私は、異文化間コミュニケーションにおいて日本語がどのように運用されるかについて研究しています。私の研究は、私自身が韓国と日本の国際交流事業のコーディネーター、翻訳家、通訳家、韓国語講師として活動する中で抱いた様々な疑問を出発点としています。

日本は、高コンテクスト社会と言われ、コミュニケーションを円滑に進める上で「察し」が重要な役割を果たします。しかし、日本語学習者にとって、状況や相手に応じて待遇表現を運用し、待遇表現のレベルが伝達するメタメッセージやコンテクストを的確に察知するのは容易ではありません。例えば、私は、むかし日本人の年上の友人に、「ヒョジンはずっと敬語だから、なんとなく距離を感じる」と言われたことがありました。当時、私は友人であっても年長者には敬意を払うべき、という韓国語使用の慣習を日本語コミュニケーションにも適用していたわけですが、それが原因で友人との間で誤解が生じていたのです。

世界は狭くなってきています。国や文化や言語が異なる人同士が媒介言語を用いてコミュニケーションをする場面は珍しくありません。また、AIの発達により翻訳アプリも進化し、対話者それぞれの母語を使った異文化間コミュニケーションも行われつつあります。しかし、「察し」や言語使用の慣習のように、固有文化に根差した語用論的な側面を第二言語学習者やAIが正しく理解し運用するためには、膨大な事例研究の支援が必要となります。

私は、異文化間コミュニケーションの事例研究が、異文化摩擦の軽減、第二言語習得や未来のコミュニケーションに役立つ知見を提供できると信じています。

<指導教員 宮平勝行教授>

ヒョジンさんが人文社会科学部研究科に入学して間もない頃、ゼミ室で自らの研究構想を熱く語ってくれたことが懐かしく思い出されます。以来、様々な難局に直面しながらも、自らに妥協することなく研究成果を積み上げてきました。その一端を社会言語学分野で屈指の学術誌で発表し、このほどその集大成として博士号を取得しました。これからも卓越した異文化コミュニケーション能力と研究力で日韓の相互理解に貢献してくれるものと思います。

【表紙紹介】



上段：琉球大学 Robot サークル
下段：琉大ハニー養蜂部
※P11～紹介ページ

琉大銘菓 はたのすけ



商品概要

名称：ゴマ菓子
 内容量：16g×12袋
 (一箱にゴマ菓子が入った小袋が12袋パッケージされています)
 金額：1,944円(税込み)
 購入可能場所：琉大生協

農学部亜熱帯生物資源科学科

高橋 誠准教授

「琉大銘菓はたのすけ」の開発に関わったすべてのメンバーが「魚のフードロスゼロにしたい」という気持ちを胸に、魚の未利用部位からアップサイクルされたお菓子です。商品を通じて、琉大ミーバイや農水一体型陸上養殖の取組みに関心を持ってもらいたいという想いがあります。



魚のフードロスをゼロに! サステナブルな水産加工を目指して

琉球大学では、科学技術振興機構(JST)の支援を受けて、2022年度から「共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)本格型」を進めており、プロジェクトでは、農水一体型のサステナブル陸上養殖システムの開発やシステムを活用したミーバイの陸上養殖を行っています。

近年の人口増加や環境変化に伴って、畜産物からのたんぱく質供給が需要に追いつかなくなるプロテインクライシスが危惧されており、水産資源からのタンパク質供給が非常に注目されています。したがって、今後ますます水産物の需要が高まることが考えられますが、一方で、水産加工の問題点として、魚体に占める可食部は平均で50%程度でアラや内臓のような非可食部はほとんど利用されないまま生ごみとして廃棄されているんです。つまり沖縄県だけでも単純に年間で60万トンの水産廃棄物がある(沖縄県の水産物漁獲量は年間120万トン以上!)ということで、環境負荷低減の観点からもこれら加工残渣を実用的に利用する手段がプロジェクトの課題として求められていました。

そこで、食品利用加工学を専門として、食品機能成分のナノカプセル化や食品未利用部位などの物理処理・発

酵処理を通じた食品の機能化に関する研究を行っている私が、琉球大学ベンチャー企業であるみらい共創マルシェ株式会社^{※1}の宇田川伸吾 特任助教より、琉球大学で養殖生産されたミーバイ(商標名:琉大ミーバイ)の可食部以外の未利用部位(内臓など)を活用してお菓子を開発したいとの相談を受けました。「陸上養殖システムだけでなく養殖されたミーバイの活用についてもサステナブルでなければ本質的に意味がない」という熱い思いが私の研究理念と一致し、開発に取り組むことにしました。

この依頼を発端に、私は魚のすき身や内臓を発酵させた調味料である魚醤の製造プロセスに着目しつつ、魚の内臓を無塩的に高温発酵させることでうま味の強い調味料を生産する発酵技術の研究に取り組んだのですが、2023年に琉球大学ブランド事業に採択されたことをきっかけにみらい共創マルシェ株式会社と共同で製品化を見据えた研究開発を本格的にスタートさせました。

ミーバイの内臓発酵では副産物として大量の魚油が生成されるため、その魚油を採取できる技術開発も進めています。ここで採取した魚油は例えばミーバイのエサの一部として活用することができるため、サーキュラーエコノミー^{※2}の観点からもサステナブルな水産加工といえますね。

研究室の学生にモノづくりのプロセスを経験させたい

琉大ブランド商品開発支援事業では、これまで私が進めていた琉大ミーバイの内臓酵素を活用した発酵技術を基として大規模生産に至適な発酵条件を研究すると共に、得られた発酵物をパウダー生産できるプラントの設計を県内食品加工・製造メーカーである金秀バイオ株式会社の協力の下で進め、琉大ミーバイ内臓発酵パウダーの生産が可能になりました。

得られた内臓発酵パウダーを活用したお菓子のレシピ考案や製造は県内お菓子製造メーカーの株式会社沖縄パイオニアフーズの協力の下で進め、琉大ミーバイ内臓発酵パウダーのうま味や魚の風味が活かされたゴマ菓子「琉大銘菓 はたのすけ」を完成させました。ちなみにお菓子のレシピは職員だけでなく研究室の学生も呈味試験に参加して決定しています。

ベースケーキ(ゴマ菓子や豆菓子)と内臓発酵パウダーの相性であったり、味や香りのバランスを決定するために学生や株式会社みらい共創マルシェの担当者と共に何度も官能試験を繰り返し、納得するまでレシピ作成したことは本当に苦労しました。最終的には多くの人に美味しいと感じてもらえるゴマ菓子が完成したと思います。

また、みらい共創マルシェ株式会社の福永耕大 特任助教の協力の下、研究室の学生によるパッケージのデザイン作成や名称、販売コンセプトの考案に取り組み、パッケージが完成しました。パッケージは箱入り販売としてお菓子の入った小袋12袋入り。例えば琉大生や学会などで琉大を訪れた方が琉大らしいお土産として購入、帰省先で多くの人に配る場面をイメージしています。パッケージには琉大の陸上養殖の取組みや発酵技術を記載したポストカードを内封することで取り組みを知ってもらう工夫をしています。コンセプトは「琉球大学の取組みや技術を手軽に美味しく多くの方々に発信したい!」です。



今後は様々な商品展開を

琉大ミーバイの内臓発酵物はうま味が強く、パウダー状に仕上げているので色々な食品に活用しやすいと思います。例えば、内臓発酵パウダーを用いたスープ類、出汁類、調味料など様々な商品に展開していきたいです。

今後は養殖する魚の種類も増やしていくので、各魚類の発酵パウダーを製造して商品のバリエーションを拡充していけたら嬉しいですね。

※1みらい共創マルシェ株式会社:琉大発の水産養殖物を活用した商品の開発、販売および大学のノウハウを活用したワークショップの企画や運営を展開しているベンチャー企業

※2サーキュラーエコノミー:日本語で「循環型経済」と呼ばれ、資源の消費と廃棄を最小限に抑え、再利用やリサイクルを通じて持続可能な経済を目指すモデルのこと。製品や素材を長く活用し、廃棄物削減と環境保護が重視されている。



農学部亜熱帯生物資源科学科4年次

平良 英之輔さん

今回のモノづくりの経験を通じて、未利用資源を活用する発酵技術や食品加工の知識を深めることができました。さらに、パッケージデザインや商品名の決定プロセスにおいて、他者と協力しながら製品のブランディングを行う重要性を学びました。商品を実際に販売するまでの一連の流れを経験することで、モノづくりにおける計画、実行、マーケティング、販売までのプロセスの理解が深まったと感じています。

個人的には私の名前をもじって商品名を提案したのですが、まさか本当に名称に採用されるとは思っていなかったのが驚くと共にとても光栄に思いました。

琉大うむてん、琉大おいもチップス



商品概要

名称：琉大うむてん
金額：1個、100円
購入可能場所：琉球大学生協中央食堂 / R's kitchen

商品概要

名称：琉大おいもチップス（仮称）
金額：カップ1個、300円
購入可能場所：やきいも繁多川堂（那覇市繁多川1-21-5 沖縄工業高校正門前）
琉大祭などのイベント



農学部亜熱帯農林環境科学科

関根 健太郎准教授

農業に携わる農学部の学生に、農作物や食品がどのように食卓に届くのかを、学生時代に知って欲しいと考えて、学生主導で商品開発に取り組む機会とすることを心がけました。この活動を通して消費者および生産者の目線で、物を見られるようになってもらいたいです。



■琉大産の無病苗で 沖縄のサツマイモを守りたい

サツマイモ基腐病という病害は紅芋の生産に大ダメージをおよぼしています。元来甘藷（サツマイモ）の苗は自家増殖したつるを苗として利用しており、潜在的に病原菌が感染している苗がこの病害の拡大に寄与しています。琉球大学農学部において無病苗の増殖法（菌の検出法も含む）を確立しており、この方法を用いた苗を生産現場へ普及していくことで、沖縄県内の農業生産を向上できると考えています。その苗を普及させるシステムの一つとして、琉球大学産の無病苗を使って得た芋を用いた商品を琉大ブランド商品とすることで、無病苗の活用を推進できるのではないかと考えました。もちろん、琉球大学農学部の認知度を上げることや、県内農業関連企業の応援になれば良いと思いますが、それ以上に、この商品を通じて、大学生の農作物への意識を少しでも変えられれば、意義があるのではないかと考えて、開発に取り組みました。

■「いもゼミ・ちゅらイム」の学生から 始まった商品開発

甘藷（サツマイモ）が沖縄県にとって重要な農作物であることを学術的に勉強しようとはじまったゼミナール「いもゼミ・ちゅらイム」のメンバーが、琉球大学令和4年度「地域共創型学生プロジェクト（ちゅらプロ）」に採択されて、「うちなーいも生産向上プロジェクト」に挑戦しました。この学生メンバーが中心となって、そのプロジェクトでつながりを持った県内の芋関連企業（農業生産法人株式会社マルシェ沖縄、やきいも繁多川堂）や琉球大学総合技術部職員（亜熱帯フィールド科学教育研究センター担当）と共同開発を進めています。

■イモゾウムシの被害を乗り越えて

本プロジェクトに参加している学生たちが琉球大学農学部の圃場で芋の生産に取り組んでいます。収穫した芋を用いた商品開発に取り組む予定でしたが、収穫した芋がイモゾウムシ

に食害されており、一緒に保存していた芋が全て使えなくなってしまいました。教科書的な知識としてイモゾウムシの問題を知っていたにも関わらず、その被害を目の当たりにすることで、芋の生産の課題やその大変さについて実感することができました。本プロジェクトに携わった学生たちにとってかけがえない経験だったと思います。



その後、琉大うむてんは大学生協で試験販売をした際に1週間で1,000食分が売れました。この原料の芋は、フィールド科学教育研究センターで農学部の学生が例年実習で栽培しているシモン芋（サツマイモの一種）であり、多くの学生が生産に関わっています。芋の生産量が限られているため、継続的な販売が難しい状況なので、安定的な供給体制の構築が第一ですが、将来的にはこの琉大うむてんが、学生や卒業生にとって、学舎の味となっていくことを期待しています。

■プロジェクトをきっかけに 農作物を通して地域の課題解決を

芋を使った商品開発は、様々な地元企業と連携して継続しており、新たな商品ラインナップを展開していきます。プロジェクトは学生主体で推進しておりますので、学年・学部垣根を越えて、できるだけ多くの琉球大学の学生に、地域の社会人の方から多くを学ぶ社会勉強の場になれば良いと考えています。このプロジェクトをきっかけに、いもに限らず、様々な魅力のある沖縄の農作物の生産者の課題について、本学に情報が集まり、地域の方と課題解決に協働して取り組んでいける機会が増えていくものと考えています。



芋の生産において病害虫対策などのために苗が大切であることを生産者へ周知することの必要性について、大学の研究者が専門的見地から発信することは、沖縄県の農業生産力の向上につながると思います。苗の大切さがわかっているにもかかわらず、苗を入手するインフラが整っていない課題の解決を目標として、琉大ブランド商品の開発が行われている点に共感して共同開発に参加いたしました。本商品を通して琉大産の無病苗の普及が広がることを期待しています。



琉大おいもチップスの開発、それから琉大祭での販売と一緒にさせていただきましたが、パッケージのデザインのディスカッションや、琉大祭でのアンケートなど、大学生の一生懸命な姿に胸を打たれ、心から大学生の活動を応援したいと思いました。



琉大うむてんの開発に参加した学生（既卒）：病害虫の管理をする農林水産省植物防疫所で働くことになりましたが、学生時代に農作物の生産の難しさとその課題について経験を通して知れたことは、仕事をする上での大きなモチベーションにつながっています。

琉大チップスの開発に参加している学生：一つの商品を作る時に、その製造工程やパッケージ、販売や広報の仕方について、いろいろなことを考えるということを知ることができました。自分たちが普段食べている食品・農作物の生産にそれぞれたくさんの人の思いやアイデアが詰まっていることを知ることができました。学生プロジェクトとして、メンバーの意見がまとまらないことや責任の押し付け合いなど難しいこともありますが、自分たちの関わった色々な商品が世に出ていくことの充実感はハンパないです。

レインボー・ブリッジ

エドワード・マサユキ・クバ(琉球大学 名誉顧問)



2024年8月30日、琉球大学の西田睦学長及び石原昌英副学長は、ホノルルにある大学間交流協定校、ハワイ大学システムのデイビッド・ラスナー総長を訪問した。

ラスナー総長は、ハワイ大学マノア校の大学カラーである緑色にハワイ州のシンボルである虹の色を配したレインボー・レイを西田学長に贈呈した。ラスナー総長もお揃いのレインボー・レイを身につけ、ホノルルのマノアと沖縄の西原町にかかる虹の橋が両大学の強い連携関係を象徴していると述べた。

ハワイ大学 デイビッド・ラスナー総長とは？

ラスナー総長はアメリカ東海岸のコネチカット州生まれ。1976年にイリノイ大学で経済学の学士号を最優秀の成績で取得し、1981年に同大学でコンピューター・サイエンスの修士号を、1998年にハワイ大学でコミュニケーション・情報科学の博士号を取得した。

ラスナー総長は2013年から現在までハワイ大学システムの総長を務めており、4つの島にある3つの大学と7つのコミュニティ・カレッジからなる10キャンパスのシステムには、約10,000人の職員と約50,000人の学生が所属している。また、6つの主要な島々にはさらに40の研究・教育センターが広がっている。彼は常々、大学はハワイ全体のより良い未来を創造する最も重要な機関であると強調している。

過去には、ホノルルの東西センター理事会メンバー、Western Interstate Commission on Higher Education (WICHE) 委員および議長、National Association of (higher education) System Heads (NASH) 理事および議長、Pacific Telecommunications Council (PTC) 理事および議長、Hawaii High Technology Development

Corporation (ハワイ・ハitek開発公社) 理事、Hawaii Broadband Task Force (ハワイ・ブロードバンド・タスクフォース) 議長、Internet2 理事などを歴任し、ハワイ大学 Distinguished Alumnus (2010 年)、イリノイ大学 Distinguished Alumni Educator (2018 年)、太平洋アジア問題評議会ポール・S・バックマン賞(2024 年)など多くの賞を受賞している。

ラスナー総長は、ハワイ先住民の文化を非常に支持しており、ポリネシアの伝統的な帆船ホクレア号の乗組員として、ワシントンD.C.からニューヨーク、タヒチからフランス領ポリネシアのライアテア、モロカイからハワイのオアフ島への航海に参加した。



フラダンスを踊るラスナー総長



ホクレア号に乗船



ハワイ大学と琉球大学の連携の長い歴史

琉球大学とハワイ大学の大学間交流協定は、ハワイ大学がすでに106大学の提携を結んでいた1988年に結ばれた。現在、ハワイ大学は200以上の大学と協定を結んでいる。そして、ハワイ大学と琉球大学の関係は過去35年間、着実に向上し、今ではハワイ大学で最も活発で強力な交流協定大学のひとつとなっている。

琉球大学とハワイ大学の強い連携を示す最たる例は、両校のロースクールに関わるものである。2000年代初頭に琉球大学が法務研究科の設立に向けて準備を進めていた中で、ハワイ大学のロースクールに助言を求めた。2004年の琉球大学法務研究科設立には、前述の助言も少なからず貢献したと思われる。

2006年、琉球大学は14人の法務研究科の学生をハワイ大学ロースクールに派遣し、2週間に渡ってアメリカの法制度について学ぶ機会を提供した。それ以来、琉球大学-ハワイ大学ロースクール・プログラムは年々規模を拡大している。現在では、複数の大学が共同でプログラムを実施し、毎年50人以上の学生が学ぶプログラムに発展している。また、ハワイ大学と琉球大学は、交換留学も実施しており、琉球大学の学生は、約1年間の留学の中で、観光学、言語学、海洋学等を学んでいる。また、ハワイ大学の学生は、琉球大学において主に日本語や沖縄文化を学んでいる。さらに、医学部が実施している研究・調査を含む短期研修においてもハワイ大学と非常に活発な交流関係を築いている。

東西センター (East West Center) は、ハワイ大学キャンパスの隣地に1960年に設置された米国の研究所である。東西センターには、米国だけでなく、アジア各地から学生や研究者が集っている。同センターのプログラムには、長年にわたって、日本、中国、台湾、韓国、シンガポール、フィリピンなどアジア各地から参加しているが、沖縄からの参加者が最も多く、そのほとんどが琉球大学からの参加者である。

2000年、ビル・クリントン米国大統領が沖縄の「平和の礎」で行ったスピーチで、東西センターとの関係を通じて沖縄の大学院生がハワイ大学で学ぶ「小淵奨学生プログラム」の創設を発表した。このプログラムには、米国と日本が50%ずつ資金を提供し、ほとんどの学生が琉球大学から派遣されることになった。

最後に、日本の伝統的な文学と文化の研究者であり、日本語を話し、読み、書くことができるロバート・ヒューイ ハワイ大学教授が、琉球大学の経営協議会に初めて外国人として任命されたことは興味深い。琉球大学は、日本に85校ある国立大学のひとつであり、ヒューイ教授は日本の国立大学法人制度の初期に経営協議会の委員を務めた外国人となった。

このように、ハワイ大学と琉球大学を結ぶレインボー・ブリッジは、変わらず美しく、色鮮やかで、力強い！

Rainbow Bridge

Edward Masayuki Kuba (Honorary Advisor, University of the Ryukyus)



On August 30, 2024, President Mutsumi Nishida and Vice-President Masahide Ishihara of the University of the Ryukyus (UR) visited President David Lassner of UR's sister-university, the University of Hawaii at Manoa (UH) located in Honolulu.

Pres. Lassner presented President Nishida a rainbow lei in the green and white colors of his university, highlighted by the colors of the rainbow, which is the symbol of UH.

President Lassner also wore a matching rainbow lei, noting that the very strong sister-university relationship with UR is symbolized by the rainbow bridge, with one end of the rainbow in Manoa, Honolulu, and the other end in Nishihara, Okinawa!

Who is President Lassner?

President Lassner was born in the East Coast state of Connecticut. He received his bachelor's degree in economics from the University of Illinois, with the highest honors, in 1976, his master's degree in computer science from the same university in 1981, and his doctoral degree in communication and informational sciences from UH in 1998.

President Lassner has been the president of the UH system from 2013 to the present. He oversees 10,000 employees and 50,000 students in the 10-campus system consisting of three universities and seven community colleges on four islands. There are also 40 additional research and education centers spread across the six main islands. He regularly emphasizes that the university is the most important institution creating a better future for all of Hawaii.

His professional activities and service as President and Vice President for Information Technology before that include serving as a member of the Board of Governors of the East-West Center in Honolulu, commissioner and chair of the Western Interstate Commission on Higher Education (WICHE), board member and chair of the National Association of (higher education) System Heads (NASH), board member and chair of the Pacific Telecommunications Council (PTC), board member of the Hawaii High Technology Development Corporation, chair of the Hawaii Broadband Task Force, and board member of Internet2. President Lassner has received many awards including Distinguished Alumnus of the University of Hawaii (2010), Distinguished Alumni Educator at the University of Illinois (2018), and the Pacific Asian Affairs Council Paul S. Bachman Award (2024).

President Lassner is very supportive of the indigenous Hawaiian host culture. He served as a crew member on the traditional Polynesian sailing canoe Hokulea on its trips from Washington D.C. to New York City, from Tahiti to Raiatea in French Polynesia, and from Molokai to Oahu in Hawaii.

President Lassner was born in the East Coast state of Connecticut. He received his bachelor's degree in economics from the University of Illinois, with the highest honors, in 1976, his master's degree in computer science from the same university in 1981, and his doctoral degree in communication and informational sciences from UH in 1998.

President Lassner has been the president of the UH system from

2013 to the present. He oversees 10,000 employees and 50,000 students in the 10-campus system consisting of three universities and seven community colleges on four islands. There are also 40 additional research and education centers spread across the six main islands. He regularly emphasizes that the university is the most important institution creating a better future for all of Hawaii.

His professional activities and service as President and Vice President for Information Technology before that include serving as a member of the Board of Governors of the East-West Center in Honolulu, commissioner and chair of the Western Interstate Commission on Higher Education (WICHE), board member and chair of the National Association of (higher education) System Heads (NASH), board member and chair of the Pacific Telecommunications Council (PTC), board member of the Hawaii High Technology Development Corporation, chair of the Hawaii Broadband Task Force, and board member of Internet2. President Lassner has received many awards including Distinguished Alumnus of the University of Hawaii (2010), Distinguished Alumni Educator at the University of Illinois (2018), and the Pacific Asian Affairs Council Paul S. Bachman Award (2024).

President Lassner is very supportive of the indigenous Hawaiian host culture. He served as a crew member on the traditional Polynesian sailing canoe Hokulea on its trips from Washington D.C. to New York City, from Tahiti to Raiatea in French Polynesia, and from Molokai to Oahu in Hawaii.



President Lassner dancing the Hula



On board the Hokulea



Long History of the University of Hawaii and the University of the Ryukyus

The sister relationship with UR was signed in 1988 when UH already had 106 such relationships, so UR started at the very bottom at 107. Now UH has more than 200 agreements with other universities. And the UH-UR relationship has risen steadily over the past 35 years so that now it is one of UH's most active and strongest sister-relationships.

The best example of the strong relationship is the one involving their law schools. When UR wanted to start its law school in the early 2000s, it approached UH's law school for advice, which was readily provided, resulting in the creation of UR's law school in 2004.

Two years later in 2006, UR sent 14 law students for an opportunity to study abroad in Hawaii at UH's law school and learn about the American legal system over a two-week period. Since then the UR-UH law program has grown larger every year and a total enrollment of over 50 students each year.

UH and UR also have very active relationships in student exchanges involving one-year study at the other's campus, ocean research, tourism studies, and medical school studies and research.

It is also interesting to note of UH's other ties with educational institutions in Okinawa:

As to the East-West Center (EWC), it is an U.S. institute started in 1960 next to the UH campus. EWC brings together students, scholars and researchers from all over Asia as well as from the U.S. Note that over the years,

participants have come from Japan, China, Taiwan, Korea, Singapore, Philippines, and elsewhere in Asia, with the greatest number of participants coming from Okinawa, and most of them from UR.

In 2000, U.S. Pres. Bill Clinton in a speech at the Peace Memorial in Okinawa announced the creation of the Obuchi Scholars Program whereby graduate students from Okinawa would be allowed to study at UH through its connection with the EWC. The program was funded 50% by the U.S. and 50% by Japan, with most of the students again coming from UR.

Finally, it is interesting to note that UH Professor Robert Huey, a scholar of traditional Japanese literature and culture, who speaks, reads and writes Japanese, was the first foreigner appointed to UR's Management Council. UR is one of Japan's 85 national universities, and Prof. Huey thus became the first foreigner to serve on any Management Council in Japan's national university system. In fact, he was on UR's Management Council when it selected Mutsumi Nishida as UR's current president.

Thus, it can clearly be seen that the Rainbow Bridge between UH and UR is as beautiful, colorful and strong as ever!

琉大ハニー養蜂部



基本情報

部員数	20名
活動日時	巣箱内検午前10時～(毎週土曜) 定例会18時～(第1月曜、第3木曜)
活動場所	農学部圃場

SNS



<https://urhoney2023.wixsite.com/youhou>

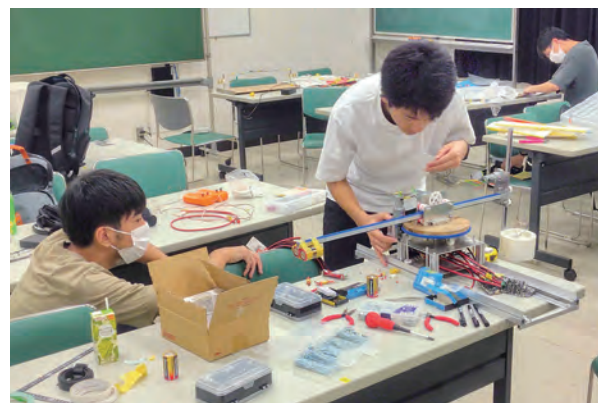
主な活動

養蜂活動、定例会、その他県内の農業関連イベントへの参加の大きく3つの活動を行っています。養蜂活動では、巣箱の内検、巣枠のもととなる巣礎の作成、蜂蜜の採集を主に行っています。特に内検は、毎週行っており巣箱に病気やカビ等の異常はないか、女王バチはいるか、蜜・花粉・蜂の量の変化や卵・ダニの有無などを確認しています。定例会では巣箱内検の報告会をし、内検で発見した問題の対策を考えたり、ミツバチについてクイズを作製して勉強会を開いたりしています。時には採集した蜂蜜を周辺の市販の蜂蜜などと食べ比べたりもしています。



琉大ハニー養蜂部では、農学部だけでなく他学部、他学科の生徒も在籍しており、多種多様なメンバーがそろっています。現に部長である私も工学部の所属で、副部長も教育学部の所属です。設立当時は沖縄国際大学の生徒も在籍していました。このような部員構成だからこそ、農学の観点とは違った斬新なアイデアが出たり、何より他学部との交流ができることも一つの特徴と言えます。また、養蜂関連の特徴として、沖縄県内だけでなく全国的に見ても養蜂を学生主体で大学構内で行える大学は、それなりに少ないと思います。中でも沖縄は亜熱帯気候の特殊性から、ミツバチの冬眠がなく、1年を通して花を咲かせる植物も植生するため、養蜂作業をできる期間が他県の養蜂と比べて長くなるため、より多くの実践経験を積むことができます。さらに、県内の農業関連イベントや、その他農学部のプロジェクなどにも参加の機会があるため、養蜂だけでなく様々な体験をすることができます。他学部、他学科、他学年所属、時には養蜂家さんや地域の農業関係者さんとも関わる和気あいあいとした楽しい部活動です。多くの学生の入部を心よりお待ちしております。

クラブ・サークル紹介



主な活動

「ものづくりの好きなメンバーが共に学び・交流する」という理念の下、大きく3つの活動を展開しています。まず、様々なものづくり系大会への出場です。ロボットだけにとどまらず、航空宇宙分野やプログラミングなど多くの大会へ出場しています。次に、講習会・勉強会です。メンバーが勉強したいものづくりに関係する分野を学習する機会を定期的に設けています。現在は多くの講習会・勉強会が立ち上がり、6個の講習会・勉強会を定期的に開催しています。最後に地域貢献活動です。プログラミング体験会やロケット体験会などのイベント開催をしています。さらに、宇宙甲子園という中高生が挑戦するロケットと模擬人工衛星のメンターも務め、多くの方にもものづくりの楽しさを体験してもらいました。



琉球大学Robotサークルが力を入れていることは、「ものづくりに挑戦したい学生の大きな受け皿」として、メンバー一人ひとりが興味関心に基づいた多種多様なものづくりに挑戦できる環境を提供することです。例えば、メンバー自らがチームを組み、各種コンテストへの出場やエンジン開発などに取り組むことで、単に技術を学ぶだけでなく、企画力、リーダーシップ、問題解決能力など、社会で活躍するために必要なスキルを総合的に身につけることができます。

また、企業との連携や外部資金の獲得にも積極的に取り組むことで活動に必要な資金を確保し、より高度な技術や機材を用いた挑戦を可能にしています。さらに、定例会やオンラインツールを通じて、メンバー間の連携を強化し、学び合う機会を創出しています。

私たちの目標は、単にエンジニアを育成するだけでなく、社会課題解決に貢献できるような、創造性豊かな人材を育成することです。そのため、私たちは今後も、メンバーが成長できるような環境を整備し、社会に影響を与えるような活動を行っていきますので、興味のある方の参加、お待ちしております。



琉球大学Robotサークル



基本情報

部員数	51名
活動日時	毎週木曜日に定例会 (+プロジェクト、講習会・勉強会などで各々活動)
活動場所	共通教育棟、工学部4号館

HP



<https://sites.google.com/view/ryudairobot/home/>

UR Topics

[4/4]

令和6年度 琉球大学入学式・大学院入学式を挙行



[4/22]

テーブル状ミドリシ属サンゴの種分化は遺伝子進化が関係する？



[6/28]

医学部の古橋沙英さんが日本呼吸器学会で育成賞を受賞



[6/18]

令和5年度琉球大学女子学生学術研究等活動うない奨励賞



[4/16]

令和5年度実施大学機関別認証評価において適合と認定されました



[5/2]

「TIME」アジア版に琉球大学が紹介されました



[6/17]

プライド月間 -Pride Month 2024-



[6/25]

THE大学インパクトランキング2024で琉球大学が総合ランキング世界401-600位、国内18位タイにランクイン。SDG14(海の豊かさを守ろう)が世界101-200位、国内8位タイへ。

【琉球大学ランキング】

SDGsカテゴリー	世界ランキング	国内ランキング
総合ランキング	401-600位/1,963校	18位タイ/74校
SDG14 (海の豊かさを守ろう)	101-200位/628校	8位タイ/43校
SDG15 (陸の豊かさを守ろう)	201-300位/741校	14位タイ/42校
SDG12 (つくる責任つかう責任)	301-400位/825校	17位タイ/47校
SDG17 (パートナーシップで目標を達成しよう)	201-300位/2,031校	6位タイ/77校



[7/2]

課外活動における学生表彰の表彰式を執行了しました



[8/14]

中小企業魅力発見フェア2024で学生が発表しました



[9/3]

令和6年度第1回及び第2回学生と学長との懇談会を開催



[7/1]

第121回 日本内科学会総会・講演会にて優秀演題賞を受賞



[7/16]

日産自動車、琉球日産自動車との産学連携協定締結・琉大北口実証実験エリアオープニングセレモニーについて



[8/23]

令和6年度大学・高専機能強化支援事業に選定されました

理工学研究科博士前期課程工学専攻では、令和7年度より現行8プログラムを6プログラムに再編し、高度情報専門人材育成プログラムとして、新たに工学専門技術と高度な情報技術を駆使して独創的なイノベーション人材を育成する「システム情報工学プログラム」を設置します。



[9/24]

医学部医学科学学生が筆頭著者の英文論文が国際糖尿病連合 (IDF) の公式医学誌に掲載されました



豊かな未来社会を共創する琉球大学基金



一般基金

※使途を大学に一任される場合は、こちらをお選びください。

教育・研究等の大学運営全般のために

- 学生の課外活動
- 社会との連携事業
- 研究活動への支援
- 施設・設備整備事業等



農水一体型サステイナブル 陸上養殖共創拠点形成基金

特定基金

「サステイナブルな食の未来」を若者が主役となって実現するために



「食」「エネルギー」、そして「人材」の好循環による資源循環型共生社会。農業と水産業が融合した新産業が創られ、世代を超えたすべての人が環境負荷ゼロで、食資源の確保と経済的な自立ができる社会を目指しています。

修学支援基金

〔税額控除対象〕

特定基金

経済的に修学が困難な学生のために



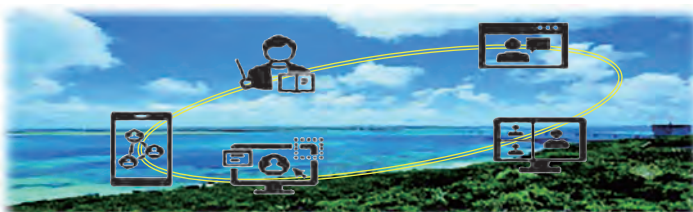
- 授業料等の免除による支援
- 学資金の貸与、又は支給による支援
- ティーチングアシスタント、リサーチアシスタント学生の生活サポート

「つながる離島・広がる沖縄」教育未来基金

特定基金

沖縄県離島地域及び北部地域の教育環境向上のために

- ICTを活用した教育環境向上の支援
- ICT機器整備の支援等



沖縄健康医療推進基金

特定基金

沖縄の健康医療発展のために



令和6年、西普天間住宅地区跡地へ移転予定の医学部及び病院において、より快適で安全な医学教育・研究、診療環境を提供します。

上図：完成イメージ※今後の進捗により変更になる可能性があります。

岸本遺贈基金

特定基金

次世代グローバル人材の育成のために



本学同窓生である岸本正之氏が多摩子夫人と共に米国にて設立した岸本ファミリー個人慈善基金の運用益を本学へ毎年ご寄附いただき、地球自然環境保全に向けた教育・研究活動やグローバル人材育成等を目的とした事業を実施しております。

QUEST 基金

特定基金

未来へつながる学生の探求心の向上のために



- 学生の海外派遣の支援
- 外国人留学生に対する支援
- 海外留学準備サポート
- 学生生活の支援等

うない女性研究者・リーダー育成基金

特定基金

男女共同参画を推進し、次代を担う女性人材のために



- 次代を担う女子大学院生、学生の人材育成及び支援
- 若手女性研究者の研究力向上の支援
- 女性研究者が安心して働ける職場環境の整備等

結転生(ゆいまーる)基金

特定基金

社会的課題である貧困の連鎖を防ぐために



- シングルマザー雇用による経済的自立支援(琉球大学職員として採用し、実技技能の向上を支援します)
- ひとり親世帯の子どもへの就学支援